



1



2



3



4



12 平成 28 年、発掘調査中の寺ノ上経塚 2 号塚。2 は上から見た写真。塚の表面は全体に小石が敷かれている。中央の穴は壺やかかわらけが埋納されたと考えられるところ

3 出土した瀧美窯産陶器壺。高さ 46.3 ㎝と壺としては大

きなものである(12 世紀後半)

4 かわらけ。法華経が墨書されたもののほか、梵字を書き連ねたものもある。文字は表裏にびっしりと書かれている。10 枚以上が埋納されていたようである(12 世紀後半)

奥州遺産

— ときを越え

受け継がれるもの —

第 132 回

寺ノ上経塚

前沢古城字寺ノ上

寺ノ上経塚は、旧古城小学校の南西 400 ㍎、見晴らしの良い胆沢段丘の縁に、直径 6 ～ 8 ㍎の 4 基の塚が隣接している。塚のうち 2 号塚とされた直径 8 ㍎、高さ 1 ㍎の塚からは、昭和 45 年に 12 世紀後半の壺 1 個と、法華経が墨書されたかわらけ数枚が地元住民により発見されている。平成 28 年には、平泉関連遺跡発掘調査団により 2 号塚の発掘調査が行われ、これらの遺物が 2 号塚から出土したものであることが確定した。

経塚とは、釈迦の入滅ののち 56 億 7 千万年後の弥勒菩薩の再来に備えて経典を埋納したもので、末法の世と考えられていた 11 世紀から 13 世紀初めにかけて日本各地で造立された。東北地方では 119 基ほどが確認されており、うち 2 割が平泉を中心とした北上川流域にある。

この地域の経塚の造立には奥州藤原氏が関与したとみられている。寺ノ上経塚もその一つと考えられ、お経を書いたかわらけを経塚に埋納した事例としては、今のところ日本で唯一の貴重なものである。

広告